
義父と養子、時々夫？ 番外編

時雨 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

義父と養子、時々夫？ 番外編

【Nコード】

N4384R

【作者名】

時雨 葵

【あらすじ】

現在連載中の『義父と養子、時々夫？』の番外編置き場になります。

現在リクエスト消化中です。

『ネタ募集？リクエストもどき企画』まとめ

『ネタ募集？リクエストもどき企画』の方にて募集いたしましたリクエスト一覧です。

出来る限り随時更新、随時消化していけたらと思っています。

いただいた順番にならんでいます。つまり上ほど先にいただいたリクエストです。

また下の方にネタバレになるかもしれないため現時点では書くことが出来ないネタ・本編で使わせていただくことにしたネタを挙げています。

消化済↓

未消化↓

・いただいたリクエスト

ニケについて旦那視点・夫か第三者視点

義父視点での日常

ニケと夫との出会い

カマルの観察日記

ニケの家族がニケについて語らう

本編二十二話のカマル視点

使用人から見たニケ

可愛いカマルにデレデレな義父がニケ父に見られたら

夫とその親友の語らい（?）

義父に対するニケ夫視点

カマルと義父のお留守番の話

夫のニケに対する今までの所業や、結婚秘話

カマルが大人になった夢を見るニケ

和気藹々、幸せ擬似家族なニケ達の仲間に入れない、やきもきする旦那

ニケ（或いは、他の登場人物）の幼い頃

お義父上&カマルと楽しそうに過ごしているニケを見つけてしまい、嫉妬する夫

近衛隊から見たニケ夫婦

カマル視点でニケと義父らぶ！な話

ニケとカマルで絵本に影響されてお菓子作り

未来話のIFでニケと夫の間に子どもが生まれたら

カマル視点からみた夫

カマルとハルウの子供達がほのぼのと遊んでいる話

バレンタインネタ

ニケ父が夫にニケとの結婚を持ちかけた時の話

ハルウから見たサイド（義父）

ニケに言い寄る男をさり気なく撃退する夫

カマルがニケと結婚すると言い出したのを聞いた夫と養父の反応

夫のラブアピールか嫉妬物

リュシオン・ヴィオレット兄妹視点でニケ夫婦

ニケ父から見た娘婿（夫）

夫とカマルの出会い

ハルウの獣人講座（生徒はニケと夫）

結婚前のエレオノーラとニケの交流

ニケの高い裁縫技術に引く夫の話

・ネタバレのため書くことが出来ない、もしくはいずれ本編に組み

込むネタ（つまり後回しになるネタ）

義母視点

…すいません、今後のネタバレを含みそうなので、ネタバレを含まなくなつた段階で書かせていただきます。

夫視点での、二ケと結婚するまで

…本編に組み込む予定です。

二ケ義母と二ケ義父の、若い頃のろまんす（？）

…今後のネタバレを含みそうなので、ネタバレにならなくなつた段階で書かせていただきます。

義母からみた義父への思い

…上に同じく、です。

義父に可愛がられる二ケを見て、内心では嫉妬している義母

…またまた上に同じく、です。

カマルの観察日記

いちにちめ

かかさまが、ちょっと前、字というものをおしえてくれた。
じーじが、れんしゅーするといいと、この『日記帳』をくれた。
だから今日から、がんばる。

かまる。

ににちめ。

ほんとうは、上の、ふつかめって書きたかった。しっぱいした。
字、むずかしい。うねうねしてる。
でも上手にかけると、かかさま、甘いのくれる。じーじも、なでな
で。

だから、がんばる。

カマル。

みつかめ。

今日はまちがえなかった。

今日はムウとメエとモオの家に行った。

ハルウさんとかかさまがおしゃべりしてる間に、四人でこっそり庭にいつて、甘い実を食べた。ムウたちの口が真っ赤になってた。えほんにでてくるおばけみたいだ。

後で聞いたら、その甘い実は大事なのだった。もう食べない。

かかさまは笑ってたけど、なんでだろう。

あと、じーじにみつかばーずにならなくてえらいってほめられた。ばーずってなんだろう。

カマル

よっかめ

よんにち……あ、まちがえた。よっかも書いてると、だんだんむつかしい字も書けるようになった。

じーじがかしこいぞ、ってほめてくれた。

かかさまは笑って、じーじには内緒ね、ってカマルのご飯に肉、いっこ多めにくれた。

じーじは今日、久しぶりにつーんってくる飲み物？おさか？おさけ？を飲んだ。髪もまっかなのに顔もまっかになって、かかさまにおこられてた。

後で、しゅーんってしてた。

だから肉、いっこあげた。

なでなでされた。

よくわかんないけど、うれしい。

カマル

いつかめ

今日はかかさまと、庭で一緒に花や草のお世話をした。……お世話をした。

かかさますごく物知り。いろいろ教えてくれる。

だから今日、いろいろおぼえた。じじさまにも教えてあげた。

食べれる草、庭には少なかった。

かあさまはいつか植えましようねって言うてくれた。約束した。

植える時には、ハルウさんのところから、分けてもらって植えよう。

カマルの好きなのと、かかさまの好きなのと、じーじの好きなのと。

カマル

むいかめ

今日はじーじとぶんぶんした。

かかさまはそれを見ながら、カマルの服をチクチクしてくれた。やぶれてたのが、綺麗になおった。

きつとかかさまは絵本に出てくるような、まほうつかいなんだ。

じーじにそう言ったら、そうかもな、って言うてた。

おいしいごはんも作れるから、そうだと思う。

ぶんぶんの後、かかさまがごはんを作ってたなら、知らない人が家に

来た。

でも、同じかつこの人が来たら、いつもかかさまは夜いなくなる。
今日も、かかさまおやすみって言ってごはんもまだなのにとっかに
行っちゃった。

だから今日はじーじとねんねした。

カマル

なのかめ

朝起きたら、かかさまが家に帰ってきてた。

うれしかったけど、さみしかったからぎゅってくっついてた。ずつ
と。

なでなでして、だっこして、いっぱい約束してくれたから手をつな
ぐのがまんした。

じーじは笑ってた。

笑っても、今日のかかさまはカマルのだからじーじにはわけっこし
てあげないことにした。今日一緒にねんねするのもカマルだ。

でもじーじだから、かかさまのごはんを笑った顔はわけっこしてあ
げようと思う。

今日のかかさまはいつものおひさまの匂いじゃなくて、うつすら花
の匂いがした。

きついのはきらいだけど、かかさまのは好きだ。

ハルウさんの家がかいだ匂いに似てた。

でもかかさまは、どんな匂いでもだいすき。じーじも。

カマル

「あらカマル、日記を続けているのね」

「……ん」

「ちよつとじ・じにも読ませて……」

「だめ。カマルの日記はカマルの」

「あ、逃げよつた」

「ふふ」

なのかめ

朝起きたら、かかさまが家に帰ってきてた。

うれしかったけど、さみしかったからぎゅってくっついてた。ずっと。

なでなでして、だっこして、いっぱい約束してくれたから手をつな

ぐのがまんした。

じーじは笑ってた。

笑っても、今日のかかさまはカマルのだからじーじにはわけっこしてあげないことにした。今日一緒にねんねするのもカマルだ。

でもじーじだから、かかさまのごはんと笑った顔はわけっこしてあげようと思う。

今日のかかさまはいつものおひさまの匂いじゃなくて、うつすら花の匂いがした。

きついのはきらいだけど、かかさまのは好きだ。

ハルウさんの家がかいだ匂いに似てた。

でもかかさまは、どんな匂いでもだいすき。じーじも。

カマル

ほんとにだいすき。

End .

『カマルの観察日記』でした。

日記を書くカマルをニケと義父が微笑ましげに見ているのは言わずもがな。

二人に見せられない日記はハルウの三つ子のお兄ちゃん（ちなみに名前はマア）に添削してもらってます。

リクエストありがとうございました。

近衛隊から見た二ヶ夫婦

近衛軍の練習場となっている場で、カンカンと模造剣のぶつかり合う音が響く。

兵士がぐるりと輪になったその中心に、音の発生源はあった。

「……次、」

「お願いします！」

「……………踏み込みが甘い、次」

一人また一人と、まるで演劇の中的一幕であるかのように兵士達が一人の男にいなされていく。

話には聞いていたが、初めて見るらしい新入りは横で啞然としていた。

近衛軍は軍の中でも精鋭とされるところで、各部隊から優秀な兵士が集められる。

その練習場でこうも一方的な光景がみられるとは、といったところだろうと俺はあたりをつけた。

「——驚いてんな」

「そりゃあ……隊長からネグロペルラ近衛第一隊隊長はすごいぞ、とは聞いていましたけど……」

「そっぴいやお前セラピア分隊長のところからこつち来たんだっけか」

「庶民ばつかのところから貴族様の多いところ来たんで肩身狭いっすよ」

声をかければ新入りは視線を隊長から逸らさないままそう言った。かつての俺を見ているようで、笑えてくる。

「生粋の貴族でバケモンみたいに強いのが隊長張つてるところだから

な。貴族だつてなめられてきた奴等からすれば威張りたくもなるさ」
「…………… 実力があつても、子爵以上じゃなきゃ近衛隊隊長にはなれねえっす」

「言つな…………… ま、その通りだが。あの『常勝將軍』も結婚前は軍の連隊隊長止まりだったって聞くしな。他にも身分のせいで這いあがれなかった奴、多い」

近衛軍つてのは精鋭なんて言つていても、その構成員は貴族中心になる。

国王陛下の側に仕える直属の軍だから、なんて理由のせいだ。
けど貴族以外にも当然実力ある兵士はいる。

ただ、相当な手柄を立てないと貴族以外の兵士が叙勲されて騎士になつて近衛入り、なんてことは起こらない。しかも近衛隊隊長ともなれば名誉な位だから、子爵家以上の家格が必要になる。

新入りはおそらく男爵家かなにかの出身なんだろう。言い方は悪いかもしれないが、出世はここで止まる。

この先、出世は諦めて普通に軍で下の方の分隊の隊長やつて退役、つてところだろう。

まあ俺も似たようなもんだろうけど。

「ま、愚痴つても仕方ないことですよね」

「だな」

「…………… そういや、隊長つていつもこうして稽古つけてるんですか？」

「ん？ ああ」

変なことを聞く奴だな、と思いながらも俺は答えてやる。

お飾りの隊長職——例えば近衛第二隊やら第四隊のボンボン共——が多い近衛隊長の中で、うちの隊長は珍しく率先して動く人だ。
それを尊敬する騎士も多い。

この新入りもそのクチかと思つて表情を窺ってみれば、どうも予想

していたものと違う。

——てつきりキラキラ目を輝かせながら『俺、一生あの隊長に付いていきます！』とでも言うかと思っていたのだが、新入りは半眼になって胡乱げに隊長の方を見やっていた。

「どうした？」

「……いや、隊長としてはいい人だなんて思うんですけどね、家庭持ってる身としては家にほとんど帰りもせずに宿舎に泊まりっぱなしってのはどうなんだろうと……」

「……………やけに突っ込んだ見方だな」

言われて見れば、確か隊長は二年前くらいに結婚したはずだが、それ以前に比べても特別に家という名の屋敷に帰る回数が増えたとかそういうことはない。

新婚と言われるような時期でもそうだったので、特に気にすることもなかったが——確かに独身のような生活っぷりだ。

これで遊んでいるわけでもなく、むしろ真面目に仕事だということだから何とも言えないが。

俺が何と言ったらいいかと迷っているうちに横の新入りが愚痴り始める。

「折角ニケちゃんみたいな可愛い嫁さんもらったってのにあの噂のきつい姑のいる屋敷にニケちゃんだけポツンだなんて……ニケちゃんはおくるくる働いて、さりげない気遣いもバッチリな……俺達下っ端騎士やら兵士の間でお嫁さんにしたい子第一位だったんですよ……そんなニケちゃんを……」

「……『ニケちゃん』ってもしかして隊長の奥方か」

「そうっす。ついでに言っちゃうとニケちゃんってセラピア隊長の一人娘で」

「あー、それで知り合いなわけか」

話を聞いて合点がいった。

下っ端兵士や騎士の給料なんて微々たるもんだ。特に騎士は名誉職って見方のせいで、もともと持つてる貴族がなるもんだからって下手したら兵士より給料が低い。

セラピア隊長がそんなやつらの食いつばぐれそうなのを家に招いて飯の世話してやってるってのは、下っ端の間じゃ有名な話だ。俺の同僚も世話になったことがあるらしい。

こいつもそのクチらしく、それで隊長の奥方を知ってるんだろ。

それにしても隊長の奥方にしては、その『ニケちゃん』とやらは身分が低い。

確かセラピア隊長自身は男爵位を持ってたはずだが、貴族とはいえ隊長の伯爵家に比べれば不釣り合いに思える。

よっぽど美人なんだろうか。

社交界やら貴族の間で美人といえばフーランジエ公爵家のヴィオレット姫が有名だ。憧れてる騎士も多い。

騎士になる時に心の主君、って『自分はその人に恥じぬような行いを心がけます』って誓いの相手に名前の上がることが多い貴族の美人どころを想像しつつ、新入りを促す。

「ニケちゃんはむさくるしい俺等に嫌な顔せず水とか出してくれて……時間あつたら破れた服とかの裁縫とかもしてくれてたんす……」

「なに、美人なのか？」

「うーん、ちよっとそついうのとは違う感じ……あ、器量はいいいですけどね、ぱつと見て綺麗！って感じの女の子じゃないんすよ。なんかこう、家に帰って笑顔で出迎えて欲しい女の子っていうか」

「ふーん」

なかなか上手く想像が出来ない。

とりあえず『嫁さんにしたいような女の子』ってわけだ。
で、こいつはそんな『ニケちゃん』に密かに惚れてたかどうかして
たんだろう。

だから仕事ばつかで『ニケちゃん』をないがしろにしているように
思える隊長を素直に尊敬出来ない。

まだ若いのになかなか複雑な奴である。

そんな新人りに同情込みで、忠告をくれてやろう。

「……ま、中途半端な敬語、どうにかしとけよ」
「ういー……了解しました」

——ついでに地獄耳だったらしい隊長が微妙に殺気発してるから、
稽古つけてもらう時は死ぬ気で行っとけ。

俺まで目をつけられてはたまらないと内心だけでそう忠告して、ち
っぽけな罪悪感をかき消して俺は空を仰いだ。

——男と女の関係なんて本人達以外分からないものだ。

End .

『近衛隊から見たニケ夫婦』ということとある近衛隊兵士の視点

からお送りしました。

近衛はぐんとはまた別に独立しているとお考えください。
皇宮警察とSPが混じったような……上手い例えが見つからないの
ですが。

リクエストありがとうございました。

ニケ父が夫にニケとの結婚を持ちかけた時の話

ロベルト・テロス・セラピアは酒が入るとどうも気が大きくなる性質の男だった。

暴力を振るうとか怒鳴り散らすということはないために特に周囲を困らせることもない、ちょっとした特徴のようなものだった。

単にいつもよりおらかであけすけになるだけ。

妻がたまに苦笑するだけだったその性質を改めようとしなかったことを後悔する日が来るとは——本人さえも思わなかった。

——久しく目立った争いもない中、降って湧いたような都の街道近くに出没するという賊の討伐任務を近衛と軍合同で行った後の、気晴らしも兼ねた祝勝会というにはささやかな宴会の席で、ロベルトはいつも以上に酒をあおっていた。

近衛と軍は、仲が悪い。

全部が全部そうというわけではないが、少なくとも今日一緒に任務をこなすことになった近衛は頭から軍を蔑視していた。

貴族とはいっても下級、しかも没落した家に生まれたために、軍でも叩き上げで今の地位にいるロベルトからすれば、実力もなく家柄だけで高位にいる近衛を好くことはあまり出来なかった。

部下の兵士にしてもそれは同じで、散々馬鹿にされながら任務をこなした後、酒でも飲まなければやっていられないという運びになり、今に至るわけである。

ロベルトは酒をあおると横の元部下の青年を見やった。

「お前も飲めアルトウーロ」

「……では」

ロベルトに勧められるがままに杯を重ねた青年——アルトウーロに、ロベルトはけらけらと笑った。

アルトウーロは本当に駆け出しの新兵だった頃、ロベルトの部下だった男だ。

しかしあつという間にロベルトを抜かして出世し、今は近衛第一隊の隊長にまで上り詰めている。そこには名門伯爵家の出であるという出自もあるが、それ以上に実力を評価されての出世だった。元部下であるだけに彼の實力はよく分かっており、アルトウーロが若くして自分の上に立っていることには不満はない。

それにアルトウーロは出世した後何かと昔の上司でしかないロベルトを立ててくれていた。

——今日こうして軍の宴会に軍からの叩き上げとは言い難い、近衛のアルトウーロが混じっているのはそのためでもある。

手酌で酒を飲みながら、ロベルトは普段よりも酩酊した思考でふと考えた。

アルトウーロは確か今、二十二、三になる。

貴族にしてみればそろそろ、といった年の頃合いだ。

現にアルトウーロよりも年長であるロベルトの長男は既に結婚して子供まで設けている。一概に自分の家と伯爵家であるアルトウーロの家を比べることは出来ないだろうが、そろそろそという話が出ていてもおかしくはないだろう。

若手貴族の武官の中では出世頭、家格も申し分ない。両親は——父

を本人は嫌っているとはいえ『常勝將軍』と異名を取った国の英雄と、若い頃から今まで社交界の華と言われてきた『黒姫』と称された夫人。母によく似た自身の容貌も整っているし、若い貴族の令嬢には家柄抜きにモテるだろう顔立ちをしている。

何拍子も揃ったこの元部下が今まで結婚話どころか浮いた話の一つや二つもないのはおかしいかのように思えた。

「なあアルトウーロ」

「はい」

「お前もよ、だいぶ出世したもんだが——そろそろ、そういう話の一つでもねえのか」

「……………」

普段ならばロベルトも余計な世話かと笑ってそのまま話を流したのだろうが、酒の魔力というのは恐ろしかった。

酒の力を借りたロベルトは止める者——周囲はものの見事に酔っ払っている——がいないのをこれ幸いと、そのまま話を進めていく。

「うちの馬鹿長男も何年か前に結婚してな、もうガキこさえてる。俺も『じーちゃん』なんて呼ばれてるくらいだ。俺はボケボケしたうちの野郎共よりお前の方が早く結婚するだろうと思ってたんだがなあ……………全くそいう話が来てない、ってのはねえだろう」

「……………」

「だんまりかい。……………なんだ、未だに決まった女がいなくてのは誰か好きな女がいんのか？」

「……………」

元々無口な方ではあるとはいえ、酒のせいか話題のせいか知らないが、今日のアルトウーロはやけに口が重かった。

未だに結婚していないのは典型的な政略結婚だった両親の不仲を見

てるせいかもしれないな、と思いながらロベルトは元上司——アルトゥーロの父の姿を思い浮かべる。

一兵卒から將軍にまで上り詰めた稀代の英雄。

戦においては負けなし、『常勝將軍』と称された元上司、サイド・アフマルナル・ファーズ・ネグロペルラ。

彼の人は武官としては優秀で、軍からは人気も高い人だったが——その半面仕事人間というか、家庭的な気配を一切させない人でもあった。

軍で用意されている宿舎に泊まり込んで過ごし、婿入り先である伯爵家の屋敷に帰ることは滅多にない。

気位の高い夫人との不仲が原因だとか、そうでないとか囁かれてはいるが、アルトゥーロにしてみればよき父とは言えない人物だっただろう。

その分サイド自身も夫人やアルトゥーロに関しては一切口出しをしないらしく、ロベルトが部下としてアルトゥーロを預かると挨拶しに行った時も、意外そうな顔をしてそうか、と一言漏らしただけだった。

そんな親子関係だからこそ政略結婚に抵抗があるのかもしれない。そう自分なりに推測しながらロベルトは言葉を重ねる。

ここは一発冗談でもかまして氣を楽にさせ、言葉を引きだしてやろう。

「好いた女もいないのか？……いないってなら、うちの一人娘でもどうだ。家事はうちのおつかあに仕込まれてるからバッチリだぞ、それなりに別嬪さんだしな。ちよつと情が強いとことがあるが……」

お前もあつたことがあつたか？まあ冗談だけ——」

「——いえ、いただきます」

スパン、と切り返されて一瞬ロベルトはアルトゥーロが酒のおかわりをしようとしているのかと思った。

しかしそれにしてはしっかりと自分の方を見て微動だにしないものだから、余計に混乱した。

気を楽しにしてやろうと冗談で自分の娘でも、と話を振ったのに——いやまさか、本気に取りられるわけがない。そう高をくくっていた。しかし、アルトゥーロは首を横に振った。

「セラピア隊長の娘さんを、妻にいただきます」

しっかりと言葉を補ったアルトゥーロに周囲のやいのやいのという喧騒の中、ロベルトが思ったのは——いつか娘を嫁にやる時には『うちの娘は嫁にやらん!』『お義父さん、娘さんを俺に下さい!』というやり取りをしてやろうと、特に娘をかわいがっていた三男と話し合ったのにそれは叶いそうにないな——ということだった。

この後家に帰って娘の結婚が決まったと家族に告げたロベルトが妻と三男、話を聞いて飛んできた長男を始めとする息子達にしばらく酒を禁止されたのが部下達の間で語り草になったのは、言うまでもないことである。

End .

『ニケ父が夫にニケとの結婚を持ちかけた時の話』でした。
酒の力って怖いですね!↑

ニケと夫の出会い

【夫視点】

「それでだねアル、その時にあの俺様陛下は昔から――」

リュシオン――腐れ縁の幼なじみに飲みにつき合わされてもう大分時間が経つ、と思いアルトゥーロが外を見れば夕暮れの赤だった空は紫紺、そして濃紺へと移り変わっていた。

酒が入るとただでさえ口数が多いのがさらに饒舌になるリュシオンは先程から聞いてもない昔話を披露していて、アルトゥーロは適当に相槌を打ちながら時折酒を口にしていた。

元々あまり酒に強い方ではなかったアルトゥーロがこうして付き合いで飲めるくらいになったのは、最初の上司の――妻の父の影響が大きかった。

事あるごとに口実を作っては部下に食事や酒を振舞っていた上司は決して裕福な貴族ではなかったが、それでも安い給料で働く部下に惜しむことなく奢っていた。

そんな上司の家に招かれたことのある部下は多い。

けれどアルトゥーロは実家が名門伯爵家であることから周囲に遠慮されており、言わば格下である上司の家に招かれるというのは貴族のマナーに反するということで正式に招かれたことは妻との結婚後しかない。

けれど一度だけ、結婚前に上司の家を訪れたことがあった。

確か珍しく部下全員を集めた宴会か何かがあって、アルトゥーロを含めた家格の高い貴族出身者もその宴会には出ていた。

慰労か、似たような名目でその場には普段あまり接することのな

い高位の武官が居合わせるようになっていたからこのような場にわざわざ出てきたのだ、と管を巻くどこぞの貴族の出の同僚を適当にいなしていたアルトウーロは、本来ならばそのまま帰宅するはずだった。

それが出来なかったのは、余計な気を回してくれたらしい高位の武官達が、わざわざその席にアルトウーロの父を引っ張り出してきたためだ。

お互いが顔を合わせることなど予期しておらず、とっとと帰ろうとしていたアルトウーロは折角親子が揃ったのだからと散々引きとめられ、結局最後までその場に残る羽目になってしまった。

だからといって疎遠な父との間に取り立てて会話もなく、どうにか会話を繋げようとする周囲がむしろわしく思えたくらいだ。

そんな苦行をしているような時間から解放されたのは月が空の中心を通り過ぎた頃で、ようやく宴が開きになった。

そろそろその場から千鳥足で引き上げて行く武官や兵士達——中には酔いがさめるまでと確実に明日の朝方までここで屍となっている者もいる——に混じってその場を後にしようとしたところで、アルトウーロは他ならぬ上司に引きとめられた。

「ひっく、アルトウーロ、お前も飲んでるか？」

「……セラピア隊長、もう宴は終わりました」

「分かってるって、お前も酒の力でちつとは羽目外したらどうだい？」

「隊長……」

普段は何と言うか、少し気が大きくなるだけの酔い方をする上司も今日ばかりは酒を飲みすぎたのか足元がおぼつかないようだった。こつという時はまだ意識や足元の発揮している同僚や部下が相手を自宅まで送り届けるのが暗黙の了解となっているが、どうしてか今

日に限っては上司の同僚や部下が揃って帰ってしまったているか、屍となっているかのどちらかとなっていた。

そうなってくると、この上司を家に送り届けるのはアルトウーロの役目ということになってくる。

普段なら身分がどうの家格がどうのと口うるさい他の貴族出身者も周囲にはおらず、アルトウーロは特に思うところもなく上司を家まで送り届けることにした。

馬車を手配し上司と共にそこに乗り込むと、酔っている上司から家の場所を聞き出して御者にそこへ行くように告げる。

家人である御者は貴族であるアルトウーロが下町と呼ばれる庶民の済む地区にほど近いそこへ行くことに難色を示したが、何かを言うことはなく頷いて手綱を握った。

馬車の中に立ちこめる酒の匂いに、これを嫌う母とは馬車を使い分けていて良かった、なんてアルトウーロが思っているうちに馬車は暗い夜道を走っていく。

これ以上に日が暮れてしまっただけは屋敷に帰るのも一苦労になるからだろう。

街灯も貴族の住む区画以外にはあまり設置されていない。これから向かう地区にはほとんどないと思っていいたいだろう。

やがて馬車は止まり、御者から到着したということが告げられる。

「セラピア隊長、ご自宅です」

「悪いな、アルトウーロ」

「いえ」

少しは酔いが覚めたのか、先ほどよりはしっかりした足取りで上司が馬車から降りるのを手伝っていると、馬車に気付いたのか上司の家の騒がしくなるのが分かった。

戸口付近の窓から灯りが漏れたかと思うと、カタンとドアが開く。

「父様……？もう、こんなに飲むなんて……」

「おう、ニケか」

「足元もふら付いて……デニス兄様、ちょっと来て下さいな」

上司を出迎えたのはまだ若い娘で、親しげなやり取りから上司の娘だと窺えた。

ニケ、と愛称なのかまるで犬猫に付けるような短い名で呼ばれたその娘は上司の姿に少し困ったような顔をして、家の中に呼びかける。

しばらくして出てきたのはアルトウーロも何度か見たことのある上司の息子で、彼もまた上司の姿に顔をしかめた。

「ニケ、ひよいひよい出迎えんって言うてんだろぅが……って親父かよ。しかも酔っぱらってっし……運んだらいいんだな？」

「ええ。台所に冷たい水があるから酔い覚ましに……」

「ほつといたら覚めるだろ」

「兄様、」

「へいへい」

ため息をつくとは彼は上司の肩を支えつつ、一度だけこちらに頭を下げてから上司を連れて家の中に消えた。

それを見送ってから娘がこちらを向いて口を開く。

上司の娘ならば貴族の令嬢、ということになるが、侍女を通すということとはなく話しかけてきた。

「わざわざ父を送ってくださり本当に申し訳ありません、ありがとうございました」

「いや……」

「貧相なところではありませんがどうぞ中へ……そちらの方も」

「……もう夜になる、気遣いなくどうぞお休み下さい」

「そうですか……本当にありがとうございます」

「お気になさらず」

驥の行き届いた娘なのか——こう言つては失礼かもしれないが、大雑把なところのある上司の娘とは思えないくらい丁寧な対応だった。

御者も最初こそ頭を下げるだけだった上司の息子に少し不満そうだったが、彼女の丁寧な対応に少しは溜飲が下がったようだ。

家の中に招かれたが、もう夜の帳が完全に降りそうな時間帯になっている。アルトウーロ自身も屋敷に戻った方がいい時間帯だし、相手にとつても迷惑になるだろう。

そう判断して断れば、申し訳なさそうな顔で頷かれるものだから少し心が痛む。

気にしないようにと言つてから馬車に乗り込むと、彼女が家の中に入ることなく馬車を見送ろうとしているのが目に入った。

年ごろの娘を長く暗い外に出しているのもよろしくはないと御者に合図して急いで馬車を出すよう指示しながらも、もう一度戸口の方を窺う。

貴族の娘らしからぬ動きやすそうな格好をしているが、それは品位を損ねるほどではなく、むしろ清潔そうな印象を与えていた。

髪は垂らさずに後ろで纏められていて、結い方から未婚だと分かる。

ヴィオレット——アルトウーロの幼なじみの少女のような華やかさはないが、ある種の魅力があると称していいだろう。

彼女を表すいい形容というか、言葉が見つからないうちに馬車が

動き出す。

何故か後ろ髪を引かれるような思いで上司の家を後にしつつ、アルトゥーロは馬車の中でしばし考え込む。

煌びやかな宝石やドレスが似合うような雰囲気ではない。それらより似合うのは――

「ああ……『家庭的』か」

考えて、ようやく自然と言葉が零れ落ちた。

自身に縁遠い類の言葉であるがためにすぐには出てこなかったが、一度口にするとそれはしっくりときた。

彼女は家庭的だった。

心の内でそう繰り返して、奇妙な満足感を覚えながらアルトゥーロは家路に着いたのだった。

――それがただ一度だけ、上司の家を訪れた時のことだ。

柔らかな灯りがもれる、あの温かな場所を。

「だからねアル、あの俺様もそろそろ痛い目を――」

「……………」

かつて訪れた柔らかな雰囲気たたえた家のことを思い出しながら、アルトウーロは杯を重ねた。

少し鈍った神経の中で酒が喉を灼く感覚だけが、妙に現実的だった。

End .

『ニケと夫の出会い』でした。

珍しく夫が喋っております（笑
夫視点は初めてだったのですが、いかがでしたでしょうか？
感想をいただけると嬉しいです。

夫とカマルの出会い

ぴちゃん、ぴちゃん、どこからか水の滴り落ちる音がしているのを、子供はおぼろげな意識の中で聞いていた。

檻に入れられ、暗いところに置かれるようになってもうどれくらいの月日が流れたのか分からなかった。

もう何日、空を見ていないだろう。

もう何日、太陽の光を浴びていないだろう。

もう何日、まともな食事を与えられていないだろう。

衰弱していく子供に残っていたのは『人間』に対する警戒心だけだった。

たまに出される食事にも手を付けようとはしなかった子供を『人間』達は疎ましがり、乱暴に扱った。

それでも子供の目から、鋭い光が消えることはない。やせ細り手足に骨が浮き出るような脆弱な体でも、子供は『人間』達に牙をむき続けた。

捕まってすぐの頃は、『何か』を待っていた。

けれど今はもう、その『何か』が何であるのかも子供は忘れてしまった。

——目の前の『人間』達に、牙を向けるのが全てだった。

その日も、いつもと同じく子供は檻に入れられ、情けだともいうように与えられた粗末な布で寒さを凌いでいた。

暗いその場所はいつだって冷えていたが、たまに来る『人間』が火を入れるとあつという間に熱くなる。その日は火が入れられることなく、子供も、他の子供も地面から這い上がってくるような寒さを必死にこらえていた。

檻に入れられているのは子供だけではなかったが、他の子供はいつも次々と入れ替わっていった。大抵は子供とそう年の変わらぬ子供で、『かかさま』や『ててさま』や『かあちゃん』や『とうちゃん』と呼びながら泣いてはそう泣きさけぶ体力もなくなり、いつの間にか『人間』達に運ばれてどこかに消えていった。子供はいつも残され、この場所に一番長くいる『獣人』だった。

その日は、妙に『人間』達の機嫌が良かった。

「これでやっとこのガキも売り飛ばせる」

「だな——『変異種』のくせになかなか買い手が見つからないからどうなるかと思ったぜ」

「猫や鳥ならともかく、観賞用とは言いにくい種族だ、仕方ねえ」

「ま、ようやく手間のかかるガキが売れるんだ、酒でも——」

ぎゃあぎゃああと騒ぐ『人間』達の様子——発する音がおかしくなつたのは、突然だった。

物が壊れる音に、檻同士がぶつかる時のような音。わめきたてる声。重い足音。

その場にいた他の子供達が不安そうに身を寄せ合う中、一人隔離されていた子供はやせ細った足で立とうとした。だが体力の落ちた体ではそれすらもなかなか出来ず、何度目かの挑戦の末に子供がよ

うやく立ち上がった時、その場所に大勢の『人間』が、踏み込んできた。

「もう大丈夫だ——ああ、こんなに痩せて！」

「父さんと母さんのところに帰してやる、安心しなさい」

「本当？」

「会えるの？」

どうやら助けが来たらしい、と子供達の間にも明るい空気が立ちこめる。この場所に連れて来られて間もない子供達には、人間に対する警戒心も小さかった。

しかし、その子供だけは違った。

「ウウ……」

力を振り絞り、周囲を威嚇する子供に気付いた『人間』達が近付いてくる。

周囲の子供達よりも明らかにやせ衰えたその様子に『人間』達の間にも戸惑いが広がるが、子供はただただ自分に触れるな近付くなど威嚇を続けた。

「……どうした」

「ネグロペルラ近衛隊長……それが、どうもやけに痩せた獣人の子供がいまして」

「近隣から攫われてきたにしては状態が悪すぎます」

「確か罪人達が獣人の子供を売り買いする時のために台帳を作成していたはずだ。それと照らし合わせる」

「はっ」

交わされる会話の意味など子供には分からなかった。

ただ、『人間』が敵だということは確かだった。
威嚇を続ける子供の目が、『隊長』と呼ばれた『人間』の目と
ち合う。

(……………くろい)

そう考えた瞬間、子供の体は崩れ落ち——意識も、闇に沈んで
いた。

「子供が——」

「早く手当てをしなければ」

「……………」

この数日後、目があった『人間』に連れていかれた先で出会った
一人の『人間』を『かかさま』と慕うことになるとは、子供——カ
マルには、想像もつかないことだった。

End .

『夫とカマルの出会い』でした。
カマルは闇商人の間をたらい回しにされていて、その商談が成立し
た直後に任務であった夫の隊に助けられました。
数日間調べても台帳がなく身元不明なカマルの引き取り手が見つ
けられなかったため、臨時で夫が預かることになっていたところ、ニ
ケに貰われたという感じです。

使用人から見た二ヶ

メルは、奉公先である伯爵家に仕えてもう二年になる。

行儀見習いを兼ねた奉公としては、そろそろ辞め時かというところだろう。

メルの生家は子爵家で、伝手でこの名門と言われるネグロペルラ伯爵家に侍女として行儀見習いに来ていた。

奉公といっても行儀見習いを兼ねているために、身の回りの世話をする下女が専属ではないが付いているし、自ら汗水垂らして働くようなことはほとんどない。メルの仕事といえば奥様——つい最近大奥様となった方の身の回りの細々としたことをしている先輩侍女の補佐や、ちよつとした手配くらいだ。

大した仕事もなく、行儀見習いでもあるために給金のようなものはほとんどないが、どこもこのようなものだろう。王宮に行儀見習いとして上がる時もこのようなものだと聞いたことがある。

王宮や名門貴族に行儀見習いとはいえ侍女や女官として務めあげたとなれば、婚姻の際に箔がつく。

メルが奉公しているネグロペルラ伯爵家は家格もさることながら大奥様である方が、若い頃に社交界の華と持て囃され今もなお美貌を誇る『黒姫』であり、その大奥様が礼儀に煩く使用人の躰にも目を光らせることが広く知られている。そのために王宮務めが望めるほどではない家の令嬢にはまずまずの奉公先だと囁かれていた。

これで当代の伯爵家当主であるアルトゥーロ様が未婚であったなら、その価値は令嬢達の間で跳ね上がっていただろうとメルは思う。

つい先日病を得た父から家督を相続したアルトゥーロ様はまだ若く容姿端麗、名誉ある近衛軍の隊長を務めあげている実力の主だ。

しかも国王陛下の覚えもめでたく、陛下の従兄でもあるフーランジエ公爵家のリュシオン様とも幼なじみの間柄だ。

二年ほど前に早々に結婚されていなければ、今でも極上の嫁ぎ先と令嬢達に目されていただろう。

それが近衛隊隊長となり、さほど間を置かずの突然の結婚。

婚約期間も短いそれは、令嬢達の間には悲嘆をもたらした。実力を伴ったの昇進と分かり、これから今まで以上にそういった話がアルトゥーロ様のところに舞い込むだろう、といった狙い目の時期にさつさと結婚されてしまったては、年頃の令嬢も泣き寝入りするしかない。

今十六歳のメルにしてみれば十歳近く年が離れているのでアルトゥーロ様はそういう対象とするには微妙だが、五歳年上の従姉はアルトゥーロ様の結婚に悔しそうな顔をしていたものだ。

——そんな顔をしていた原因の一つは、アルトゥーロ様の結婚相手が従姉やメルよりも家格の低い、男爵家の出であったのも大きいと思う。

公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵。

貴族の家格としてはこの五つが主だ。異国には辺境伯といった地位もあるらしいが、この国ではだいたいこの五つが家格とされている。

その中でも男爵家は貴族としては最下位の家格で、裕福な家もあるが、貧しい貴族とは名ばかりの家まで様々だ。没落した貴族など珍しくもないが、男爵家にはそういう家が目立つのもまた事実だった。

奥方様——アルトゥーロ様の正妻である二ケ様はそんな男爵家の中でも没落したと称されてもおかしくないような家の出なのだ。

二人を結ぶ縁は二ケ様の父がアルトゥーロ様の昔の上官だったというそれだけで、他に学友だったとか幼なじみだったとかそういうことはない。

二ケ様自身、社交界にはほとんど姿を見せない人で、その名を知っている人はメル周りのにもほとんどいなかった。結婚に憤慨していた従姉も『誰なのかしら』と零していたくらいだ。

そんな二人が婚約——結婚するとなった時にはこの伯爵家自体も大層驚いたという。

メルが先輩侍女から聞いた話になるが、結婚を言い出したのはアルトゥーロ様で、家令はおろか大奥様でさえもそうだった——結婚に至る関係の令嬢がいるとは知らなかったらしい。

確かにアルトゥーロ様は仕事熱心な方で、高位の貴族の間ではそうおかしいことでもない女遊びというものを全くと言っていいほどされてこなかった。

そんなアルトゥーロ様が結婚、ということとで屋敷はとりあえずめでたい話ではないかと思おうとしたらしい。

ところが、二ケ様の父が大旦那様——大奥様が毛嫌にする夫のこれまた昔の部下であったことが事態をさらにややこしくしたらしい。この結婚が大旦那様の差し金ではないのかと勘ぐった大奥様の機嫌は地に落ちた。——もっとも使用人達からしてみれば大奥様と同じく実の父ながらも大旦那様を嫌っているアルトゥーロ様が、みすみすそのいいなりになることはないだろうと思っていတာらしいのだが。

ともかくそんな中で婚約と婚姻が滞りなく結ばれ、二ケ様は晴れてアルトゥーロ様の妻となった。

そして今まで二年間、二ケ様は屋敷でひっそりと暮らされていた。——そう、ひっそりと、だ。

普通伯爵家の奥方に収まったのだからもつと権勢を振るうとか贅の限りを尽くすだとかそういう風に振舞ってもおかしくはないと思うのだが、ニケ様は本当にひっそりと日々を過ごされておいでだった。

大奥様を立てるにしてもほどがあるだろうという遠慮っぷりに、行儀見習いに来ていたメルのような立場の侍女達はぽかんとしてしまつたものだ。

古参の侍女達は何か思うところがあるのかもしれないが、メル達はいずれ家に戻ってどこぞの貴族と婚姻を結ぶことが分かっている分、一種の気楽さがある。

そんなメル達からしてもあまりにひっそりとしたニケの暮らしぶりには首を傾げるものがあつた。

侍女を使うこともなく、いつの間にか自分で全てやってしまい、友人を屋敷に招くといったこともほとんどない。時たま友人や実家を訪ねていくことはあるが、それも年々少なくなつていた。

見事な刺繍を施した手巾などが、送られることも使われることもなく部屋の引出の中に溜まつていつているのをメル達は知っている。栄華を誇る名門に望まれて嫁いだとは思えないその暮らしぶりに、なぜアルトゥーロ様はニケ様をめとつたのかということが一時期メル達の間では話の種になつた。

アルトゥーロ様は仕事が忙しいのかなか屋敷には戻られない。家格の違うニケ様が嫁いでこられて頼れるのは夫であられるアルトゥーロ様だけなのに、とはニケ様に同情的な友人の言だが、メルもそう思う。

貴族の女にとって、格上の相手に望みを伝えることがどれほど難しいことか。伯爵夫人になつたとしても元が男爵家の出であるニケ様にとっては、侍女に命令するにしてもそれはし辛いはずだ。何せ

侍女の中には子爵家の出であるメルのような、結婚前の二ケ様にとっては格上の相手であった者がいるのだから。

メルなど自分が二ケ様だったらと想像して身ぶるいがしたものだ。

そしてメル達から同情を寄せられているなど知りもしないであるう二ケ様に転機が訪れたのは、つい最近のことだった。

將軍であつた大旦那様が倒れ、一線を退くことになった。

そこで問題になったのが、大旦那様と大奥様を始めとした屋敷の使用人達との不和だ。

成り上がり者だと大旦那様を嫌う大奥様や古参の使用人が多いこの屋敷では療養が必要な大旦那様の世話を買つて出る者はいなかった。メル達も行儀見習いに来ている以上、そんな大役を仰せつかるわけにはいかない。

——そんな中、何故か二ケ様がその役を務められることになった。家督の相続に伴つて部屋の移動と改装が行われ、大旦那様は屋敷を避けてか同じ敷地にあるとはいえ、ほぼ独立したこじんまりとした離れに移られることになった。二ケ様も今まで大奥様が使つていた部屋を譲られたが、大旦那様の世話のために普段は離れの方で居住されているらしい。

甲斐甲斐しく大旦那様の世話をする二ケ様を見て、侍女でもあるまいに、と古参の侍女が漏らしていたらしいのは見習い仲間の証言だ。

それだけでなく、アルトゥー口様がある日突然連れ帰つて来られた獣人の子供をも二ケ様が面倒を見られることになった。

獣人といっても愛玩用の可愛らしい獣人ではなく、まさしく『獣』といった風体の子供で、身綺麗にするよう言いつけられたメル達見習い侍女はその子供に暴れられて散々な目にあった。

だというのにニケ様はあまつさえその子供を自身の養子にまでされたらしい。

古参の侍女達はこれにもまた色々と言っていたらしいが、メル達の間ではよっぽど今まで寂しかったのだろつという話になった。

頼みの夫は仕事ばかりで、子もなく、肩身の狭い日々。

それは獣人であっても慰めにしなくなるというものだ。

そんなニケ様の状況を知ってか知らずか、あの獣人の子供もニケ様と大旦那様には大層な懐き具合らしい。

またあの子供には近付きたくないが、よくやってくれたというのがメル達の見解だった。

——そうして、離れは三人の住人を得た。

「……あの子供、白かったのね」

遠目に庭で遊ぶニケ様の獣人の子どもを見て思わずそう口にする
と、メルは踵を返した。

メルはじきにこの屋敷を辞して家に戻る。

きつとその日はそう遠くはなくて、そうなったらこの屋敷に来ることなどほばないだろう。

けれど、メルは思う。

物語のように、皆が幸せになればいいと。

幸せそうな顔をする二ヶ様の笑顔が、壊れなければいいと。
静かで穏やかな離れの日常が続けばいいと。

だからメルは今日も、箱庭のような離れを遠目に見て、また踵を返すのだ。

End .

使用人から見た二ヶ（後書き）

思わず長い話になりました…

使用人から見た二ヶというより、使用人から見た一連の流れといった感じに……

リュシオン・ヴィオレット兄妹視点で二ヶ夫婦

高貴な血筋とその豪奢な美貌で社交界の華と名高いフーランジェ公爵家の兄妹は、その仲が大変いいことでも有名だった。

先王の妹である母譲りの金髪に父譲りの董色の双眸を備えた二人は兄妹だということを疑うことは出来ないほど、性別は違えど似通ったものを持っていた。

そしてそれは、容姿だけではない。

ヴィオレットが香り高い紅茶に目を細めつつ兄に笑いかける。

「ねえお兄様、今度二ヶ様を屋敷にお誘いしたいのですけれど、いかが思われます？」

「それはいい考えだね、ただ他に誰を呼ぶかが気にかかる」

「大人し……穏やかな方ばかりですから大丈夫ですね。アル兄様に兄様が睨まれるのは……面白い気もしますけれど、残念ですもの」

「そうかい。二ヶ殿とは仲良くやれそうかい？」

「物静かな方ですけど、大丈夫です。むしろ聞き上手な方ですから、私の方が話の種に困ることもなく、どんどん話してしまいますの」

「それはそれは。ただアルも無口過ぎる方だからね、二人は会話出来ているのだろうか」

にこやかに今日も最高級の紅茶を飲みながら会話する二人は一幅の絵画のようで、その場に居合わせた使用人達も眩しげに目を細めた。

——美貌に笑みを浮かべ、熱心に話しているのがたとえ二人の幼なじみの夫婦事情であったとしても、傍目からすれば絵になる光景

なのである。

「アル兄様も、あんまり仕事ばかりではなく屋敷にも戻られたらいいのに。必要なこと以外もどんどんやってしまわれるから、屋敷に帰られない日が多いのでしょうか？」

「まあ、あの若さで近衛第一隊の隊長なんてものになってしまっているからねえ」

「ここ最近はその、戦なども起きておりませんから、確かに昇進が早すぎるという声があるのはお聞きしておりますけれど……」

「ネグロペルラ將軍の時とは、時代が違うからね……まあアルなら大丈夫だろうけどね」

茶目つけたつぷりに片目をつむってみせた兄に苦笑して、ヴィオレットも同意する。

なんだかんだと美味しいところを持っていく幼なじみのことだから、きつと最終的には仕事も家庭も上手くいくだろう。

ただ。

「アル兄様は……美味しいところは持っていけるのにここ一番というところはいつも兄様や他の方に取りられておいででしたから心配ですわ……」

「……………」

妹のしみじみとした呟きにリュシオンはピタリと固まった。

(……………確かに)

思い返せば昔から見かけによらず要領の悪い割には何だかんだと美味しいところを持って行っていた幼なじみだが、ここ一番という

時には妙に勝負に負けるところがある。ここ一番という時に、間違つてこそいないがかなりズレた行動・言動で見事に勝負を潰して来た過去が二人の幼なじみにはあった。

そのここ一番が少ないから、本人が気付いているかどうかは怪しいが。

いやしかし、さすがの幼なじみも大丈夫なはずだ。

——そう信じたい。

「ふ、夫婦のここ一番といえばアレだね、浮気がバレた時だからきつと大丈夫だ」

「二人ともそういう方ではないですものね。……あ、ここ一番といえばやはり求婚ではないかしら。それならもう乗り越えていらつっしゃるから平気ね」

安心だわ、と笑う妹に同意して頷き、同じく安堵していたリュシオンはふと意識の片隅で思う。

——そういえばアルが二ヶ殿になんと求婚したか聞いた覚えがない、と。

たらりと背中を汗が滑り落ちる。

「お兄様？」

「……いや、それにしても今日のドレスはよく似合っているね。新しく仕立てたものかい？」

「あら、ありがとうございます。お兄様のおっしゃる通り、新しく仕立てましたの」

「そうかい。そういえば最近は——」

じわりと嫌な予感が滲みだすのに意識的に蓋をして、リュシオンは妹との茶会を楽しんだ。

カマルとハルウの子供達がほのぼのと遊んでいる話

二ケの養子となったカマルは、普段伯爵家の屋敷——正確に言うならばその中の離れ——で暮らしている。二ケの籍に入ったカマルの籍自体は貴族なのだが、獣人という身ゆえに複雑な事情を抱えていた。獣人に対する蔑視が色濃く残る貴族階級で少しでもカマルが快適に過ごせるようにと心を砕く二ケの意向で、カマルが屋敷の敷地の外に出ることはほとんどない。カマル本人が未だに初対面の人間に怯えを見せることもある。元々貴族の幼い子供が外に出ることは少ないが、カマルの場合はそれに輪をかけて少なかった。

しかし幼いカマルにそれは厳しいものがある。

そんなカマルの慰めとなるのは、義父の知己である薬屋を営む獣人・ハルウの子である三つ子と共に遊ぶことだった。

「カマル、メエと庭いこー！」

「カマルはおれとモオといっしょにマア兄に剣を教えてもらうんだよ！」

「そーだそーだ！」

「……」

賑やかな三つ子にわたたと言葉もなくカマルは慌てる。口数の少ないカマルに対して三つ子は口も達者で、妙な遠慮もないせいカマルは大抵三人に圧倒されてしまっている。

今日もそれは変わらずに、一緒に遊ぶことの少ないカマルの取り合いになった三つ子にどう対応していいのかわからず、ただオロオロと戸惑っただけだった。

「こないだは剣になったんだから、今日は庭！」

「庭はべんきょーの時に行つたじゃん！」

「薬草じゃないもんお花だもん！」

「つまんねーって！！！」

「別にムウとモオは来なくていいもん、カマルと一緒にいいんだもん！」

三つ子のうちムウとモオは男で、メエだけが女であるものの一番気が強く、二対一という状況でも一歩も引くことなく兄弟に相対していた。

こういう時は大抵母であるハルウか、三つ子の兄であるマアが仲裁に入ってくれるのだが生憎と二人ともその場にはいなかった。

なすすべもなくカマルが三つ子に翻弄されていると、不意に三つ子がピタリと言い争いを止めた。唐突なことにカマルが三人の顔を見やると、三人共が不敵に笑っている。——カマルは嫌な予感をひしひしと感じた。

「カマルに決めてもらおう！！！」

次の瞬間向けられた期待の眼差しに、カマルは反射的に一歩退いた。三人ともがカマルは自分の味方をしてくれるという期待に満ち溢れていて、どちらか一方を選ぶのは少々難しい状況だった。

しかし、カマルの意思はとうの昔に決まっていた。

「庭が、いい……」

その言葉を聞いた瞬間、メエは大きな瞳を輝かせ——残ったムウとモオは不満そうに耳を立たせた。

どうして、と今にも問い詰めてきそうな二人に、カマルは慌てて口を開く。

「かかさまの好きなお花……あげたいから……けんは、こんどじゃだめ？」

こてん、と首を傾げたカマルに三つ子は顔を見合わせた。

『カマルのかかさま』である二ケのことは三つ子もよく知っていて、三つ子の家に来るたびにちよつとした手土産——主に庶民には手に入りにくい甘い物——をくれる二ケには三つ子も懐いていた。

「二ケさんのためならしょーがないな！」

「うん！」

「いつもあまーいの、くれるもんな！」

「くれるもんな！」

剣をしたいと言っていたムウとモオはそう言うと、二人でカマルの脇を固め庭の方へと歩き出す。置いていかれそうになったメエは仲間外れは嫌だとばかりにカマルの背中にしがみついた。

三つ子を纏わりつかせてふらふらと歩くカマルの頭には、花をあげたら二ケが笑ってくれるかな、という一念のみであることを知るの、誰もいなかった。

過去拍手 そのいち

【御礼会話文二種】

ニケ「拍手、ありがとうございます。はい、カマルからもお礼をしましょうね」

カマル「ん。……ばちばち……あり、がと」

ニケ「よく出来ました。皆さん、これからもよろしく願いしますね」

サイド「俺からも頼もう。義娘と孫をよろしく頼む」

カマル「じーじも！ね？」

ニケ「お義父様もちろんよろしく願いいたします」

サイド「……まあなんだ、拍手ありがとう」

リュシオン「拍手をどうもありがとう、皆さん。このリュシオン・ダンドウリオン・フーランジェ、頑張って皆さんからの期待に応えていく所存だ。」

……ほらアル、拍手してもらったんだよ、お礼の一つや二つや三つや四つ、さらっと言ってみせるのが男というものだよ」

アルトウーロ「違うだろう……アルトウーロ・ネグロペルだ。拍手、感謝する」

リュシオン「全くこの朴念仁かつ無愛想め……どうせ二ヶ殿にもそんななんなんだろう」

アルトウーロ「……………」

リュシオン「無言は肯定だろう？しょうがないなあ、今夜は友人のため一杯付き合おうじゃないか！」

アルトウーロ「……………」

【次ページには会話文はありません。】

【……と書いておきながら実はもう一つ会話文をこそーり。】

二ヶ「拍手、どうもありがとうございます」

アルトウーロ「……拍手、感謝する」

ニケ「今後ともどうぞよろしくお願いいたしますね。日頃の応援、ありがとうございます」

アルトウーロ「ああ……俺も……努力、しよう」

ニケ「旦那様？少々顔色が……お疲れですか？」

アルトウーロ「い、や……大事ない」

ニケ「……差し出がましゅうございましたね、申し訳ありません」

アルトウーロ「別に……冷えてきた、中に入れ」

ニケ「……はい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4384r/>

義父と養子、時々夫？ 番外編

2011年8月29日19時27分発行